

# NJ 素流協 News

平成23年7月31日  
第79号

平成23年7月31日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館9階)  
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

## 主要木材の需給見通し

### 平成23年第3四半期及び第4四半期

林野庁は去る6月27日「平成23年度第1回木材需給会議」を開催し、「主要木材の需給見通し(平成23年第3四半期及び第4四半期)」を策定、発表した。

同「見通し」は四半期毎に開催される木材需給会議において、主な国産材や輸入材の需給動向が向こう2四半期(6ヶ月)にどのような推移するか議論し、まとめたものである。会議を構成する委員の主な所属は、全国木材組合連合会、全国森林組合連合会のほか、日本合板工業組合連合会、日本木材輸入協会、大手林業会社、住宅金融支援機構、経営コンサルティング会社などとなっている。

今年度の木材需給動向については、5月に発刊された本年版「森林・林業白書」にも記事があるが、3月に発生した東日本大震災の影響についての詳しい記述がなされ

ていない。今回の木材需給会議は震災後初めて開催されたものであり、震災が社会、経済、林業・林産業に与えた影響を踏まえた上で、今年度後半の動向を予測している点が注目される。見通しの概要は次の通りである。

#### 1 経済情勢

実質GDP成長率は、21年度はマイナス2・4%であったが、22年度2・3%(実績)、23年度0・3%、24年度3・0%と緩やかな成長が見込まれる。ただしその前提条件として、①今年度中に10兆円超の補正予算が編成されること、②今年度下期公務員給与が削減されること、③電力供給に混乱がなく、原発問題も悪化しないことが挙げられている点に注意を要する。

#### 2 住宅着工

新設住宅着工戸数の動向はここ数年と変わらない。1、2月は、

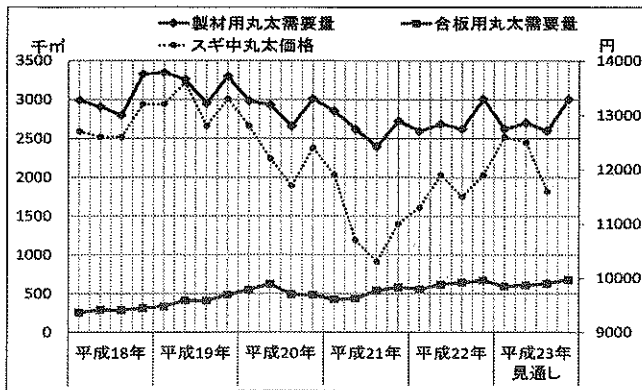
対前年同月比で2・7%増、10・1%増と2ヶ月連続プラスであったが、3月2・4%減となった。4月は0・3%増と前期並みの水準で推移した。東北3県の新設住宅着工戸数の全国に占める割合は3%であり、影響としては大きくないと考えられている。

23年度の新設住宅着工戸数見通しは82・7〜88・0万、平均84・7万戸、復興需要が本格化する24年度は、87・9〜101・3万、平均90・5万戸となっている。

#### 3 木材輸出動向

平成22年の輸出総額は、102億円(対前年比98%)とほぼ横ばいであったが、国別では、中国が1億円増の26億円、フィリピンは3億円増の20億円、米国は3億円増の15億円など増加が見られた一方、韓国は15億円減の8億円と大幅に減少した。

品目別では、丸太が6億円増の9億円、製材品が3億円増の27億円、合板が1億円増の6億円となっている。



国産材丸太の需要と素材価格(スギ中丸太)の動向

4 主要木材需給動向

(1) 国産材(製材用丸太及び合板用丸太の需要)

①製材用丸太

震災発生後、合板工場の操業停止による素材の滞留、燃料不足による素材生産の停止、製紙業の操業停止による背板チップの滞留などが起こった。第2四半期は緩和した需給情勢が継続するが、第3四半期以降は復興需要が少しずつ出てくる見込みで、年間の供給量は前年並みと見通している。

②合板用丸太

第3四半期は被災企業の生産再開により供給量が増加する見通し。第4四半期は被災企業の生産ラインの増大により、供給量が増加する見通しとなっている。

(2) 輸入材

米材はじめ各地域とも、震災の影響で第2四半期の需要は落ち込んでいる。第3四半期も季節要因等もあつて低調が続く見通しだが、第4四半期は回復傾向になると予測している。

(3) 合板

①需要

国内合板は、第2四半期はメーカー、流通とも仮設住宅向けの供給を優先した。6月下旬現在、在庫が少なくなった木材販売店にも合板は補填され、在庫は正常に戻っている。

第3四半期、首都圏の臨海部高層マンションの建設は見送られているが、被災地を除いて住宅需要は好調を維持し、需要も前年同期を上回る見通しとなっている。第

4四半期は住宅などの復興需要が東北3県で順次発生する見通しとなっている。

輸入合板は、第3四半期、戸建

住宅需要の堅調推移により構造用合板、フロア台板及び住設機器向けの薄・中厚合板需要とも好調に推移する見通し。第4四半期は復興住宅の需要により、住宅関連資材は好調に推移する見通しとなっている。

②供給

国内合板は、第2四半期、被災6企業の生産減を他のメーカーのフル生産でほぼカバーする見通しで、価格もほぼ安定化する見通し。

第3四半期は、被災企業の生産再開やその他企業のフル生産が増大する見通し。第4四半期は被災企業の復旧のペースアップもあり、生産が増大する見通し。

輸入合板は、第2四半期、震災の影響で各国の日本向け供給数量が増加した。特にマレーシアのサラワク州では出材が回復しており、各工場の生産量も増加している。

第3四半期は震災後の混乱が収まり、通常の入荷数量に戻る見通し。(4) 構造用集成材

①国内製造

第2四半期は、合板や住宅資材等の不足他、物流の停滞の影響等から住宅の建築が滞り、集成材受注も止まるなど大きな影響を受け、前期以上に減少する見通し。

第3四半期、合板や住宅資材等の不足はほぼ解消され、住宅や公共建築物の発注等もある程度見込まれるが、原発の問題、電力の供給不安等もあり、生産量の伸びは大きくは期待できない見通し。第4四半期は、ある程度通常期の荷動きが期待され、生産量も第1四半期よりやや回復する見通し。

②輸入

第2四半期の入荷量は前期同様に安定推移する見込み。第3四半期の入荷は、前期比減の見通し。第4四半期は、実需の発生を見込んだ堅調な成約を見込み、引続き現状並の入荷数量が維持される見通しとなっている。

# 一葉 樹木の気象害(1)

## 雹の害

雹による被害は、タバコやキャベツの葉に孔があく、クワの葉がちぎれて落ちる、リンゴが傷だらけになるなどが知られている。

樹木では、5月頃の雹によって今年伸びた新芽が折れる被害が時々発生するが、木が枯れてしまう例は見たことがなかった。

最近、沿岸部でアカマツ林に雹によると思われる被害が発生した。今回は、被害の状況と症状についてお知らせする。

被害林は、樹冠の針葉が異常に少なくなっており、よく見ると葉を着けている小枝がほとんど無かった(写真1)。中には、樹皮が剥げ落ちて既に枯死しているものもあった(写真2)。

同じ林に生育する広葉樹の幹にも傷跡があり、傷は北向き面に集中的に発生していた(写真6〜8)。枝には多数の同様の傷が上面のみに見られた(写真9〜12)。

アカマツを切り倒してみたところ、

幹の上部で広葉樹と同様北向き面に傷跡があり(写真4)、枝では上部に集中して樹皮が剥げる傷が見受けられた(写真5)。樹冠部を見ると、同じマツでも南側に比較して北側の針葉が少なかった(写真3)。梢端部の小枝のほとんどが折れていた。

現地の方の話では、去年の秋に北からの強風を伴って雹が降り、その後からこの林の様子がおかしくなったということであった。また、雹によって自動車のボンネットが凹み修理をしたとのことであった。

以上のことを総合して、このアカマツ林の異常は雹による被害と判断した。また、針葉の減少は、梢端部が雹による傷の部分で折れて脱落したためと推定された。



写真4 アカマツ幹上部

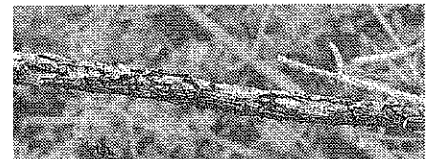


写真5 アカマツ細枝



写真1 アカマツ被害林

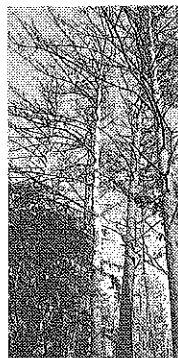


写真2 アカマツ枯死木



写真3 北側の針葉少ない



写真6 コシアブラの幹



写真7 ウリハダカエデの幹



写真8 コナラの幹



写真9 サクラ類の枝



写真11 コナラの枝



写真10 ウリハダカエデの枝

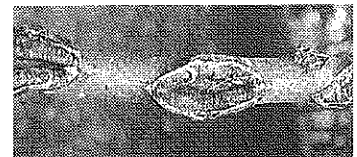


写真12 エンジュの枝

作業道散策

16

カケス (架巢)

全長33cmで、森に住む野鳥では比較的大型。頭に白黒の斑があり、顔は黒く、怖い顔をしており、さしずめ胡麻塩頭の頑固親父の風情である。



翼の鮮やかな青色がなかなか洒落ているが、ジエージエーとしわがれた大きな声で鳴き、姿に反して美しい声とは言いがたい。大(悪)声で喧しくしゃべりまくる人をカケスのようだと言うが、なるほどと思う。



カラスの仲間では頭が良く、チェンソーなどの物音や他の野鳥の真似がうまく、飼われたものは人の言葉も真似ると言う。

大きな体で両足を揃えてヒョイヒョイと跳びながら歩き、昆虫や木の実を食べるが、ドングリが好物で、冬に備えて稲わらやヒエの束に大量に貯めこんでいる。

渡りはしないが、夏の間は山地に移動して、秋から冬に里に降りてくる漂鳥である。静かな林の中で突然に大きな鳴き声を聞くこと

があるが、用心深く、姿を見ることは少ない。

滝沢村のお婆さんからこんな話を聞いた。「昔、カケスは馬喰だったんだと。口先でうまいことを言つて、駄馬を売りつけるんだが、また来た時にはジエジエジエー・

ジエジエジエーって胡麻塩頭を掻きながらぺこぺこしてたんだとさ。」

稲わらで作った「つと」にドングリを入れて、テグスで仕掛けた毘で捕まえて、ペットとして(?)飼っていた人が居たそうである。

冗談欄

ここにも女性のしづとさが

かつて植木等が「わかっちゃいるけどやめられない。」と歌って大ヒットした曲がある。

ある新聞社が読者に「やめたいのにやめられないこと」についてアンケート調査した結果を記事にしている。回答者は約2千700人。

酒や煙草だらうと思いきや、1位は間食、2位が食べ過ぎであり、この2つの回答が3位以下を大きく引き離している。

酒は4位、煙草は9位である。お菓子をつまみながらアンケートに答えているという女性もいれば、間食は呼吸やまばたきと同じ感覚であるという女性もいる。

意外なのは酒や煙草、麻雀、競馬ではなく、新しい事柄が多いことである。3位がレジ袋や紙袋をため込む

こと、5位が短気、6位が夜更し、7位がいつもマイナス思考、8位が感情が表情やしづとさに出ることであり、10位のネットサーフィンに至っては昔人間には何のことか分らない始末である。

ここであげられた多くは女性に多い行為である。

このアンケートでは一緒にきっぱりやめられたことについても尋ねている。

1位がたばこ、2位賭け事、3位酒となっており、これらは男性に多い行為である。

何のことはない。やめたいと思ったことを、男性はきっぱりとやめ、女性はやめられずいるだけのことである。いやはや、ここでも女性がしづとくとく頑張っているのである。

平成23年7月分の販売実績

- 1 合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約1,450m<sup>3</sup>減少、カラマツが約1,030m<sup>3</sup>減少し、全体では約2,490m<sup>3</sup>減少している。昨年同月と比較すると、スギが約8,980m<sup>3</sup>減少、カラマツが約6,540m<sup>3</sup>減少、アカマツは約2,420m<sup>3</sup>減少し、全体では約18,020m<sup>3</sup>減少している。なお、これら合板用出荷量のうちシステム販売取扱量は前月より約390m<sup>3</sup>減少している。
- 2 その他（合板用以外）の出荷量は前月より約620m<sup>3</sup>減少、昨年同月より約3,680m<sup>3</sup>増加している。
- 3 今年度の年間計画量に対する1か月あたりの出荷量の割合（目標達成率）を33.3%とすると、今月の全体出荷実績は、計画数量を11.8ポイント下回る進捗状況となっている。

樹種	長級 (m)	当月出荷量			今年度累計			
		合板用	その他	計	合板用	樹種別割合	その他	計
スギ	2.0	2,305			10,014			
	4.0	605			3,142			
	計	( 121) 2,910	3,612	( 121) 6,522	( 856) 13,156	56.8	( 173) 15,452	( 1,029) 28,608
カラマツ	2.0	1,517			7,877			
	4.0	553			1,843			
	計	2,071	1,235	3,306	( 95) 9,720	41.9	( 149) 5,657	( 244) 15,377
アカマツ	2.0				270			
	4.0				10			
	計		303	303	( 0) 281	1.2	( 0) 2,702	( 0) 2,982
その他針					21	0.1	82	103
広葉樹			83	83	0	0.0	223	223
合計		( 121) 4,981	5,233	( 121) 10,214	( 950) 23,178	100.0	( 322) 24,115	( 1,272) 47,294
目標達成率 (%)								21.5
計画量								220,000
バイオマス用針葉樹チップ材 (単位:トン)				0				0

( ) はシステム販売取扱量(内数)

落穂拾い

ずっと以前に作家・宮本美智子が著書の中で、「いまの日本では、国を挙げて『男が悪い』『ニッポンの男はダメ！』と言っている観がある。個人が責任を持ってものを言い、対決していくことを身につけていない国では、『空気が世論を作り上げ、その世論が言うことが無条件に正しくて権威あるものになっていく傾向が強いが、リベラルで公正でありたいと願っている私としては、そうした時の風潮にだけは加担したくない。それどころか、風潮として世間に浸透した意見や権威には常に疑いを持っていたいと思うからだ。そもそも世界中で、男だけがよくて女が悪い国がないように、女だけが立派で男がダメな国もまたない。大体、それぞれの国に共存する男と女とは、それぞれのレヴェルに釣り合っているものなのではないだろうか。ちょうど一国のリーダーというものは、その国の国民の民度に合ったレヴェルの人間になるように。」と言っている。このことについて落穂拾い子がつらつら思うに、日本の政治家と彼らを選んだ国民との間の関係についても言えることであろう。政治家だけがダメで骨なしで、国民は優秀であるというのではありえない。政治家が劣化しているならば、ご同様に国民もダメであり、同レヴェルなのだ。

「二流の愉しみ」の中の「当人論」で次のことを書いています。「当人というものは、思い知ることがない存在である。そしてこの世には、その当人と他人で成り立っている。他人の目には、ありありと見えることが当人には見えない。(中略)中国人は、尖閣列島は中国のものだと言っている。長年ひとことも言わないで、この島々の付近から石油が出ると聞いて、にわかには言い出したのである。尖閣列島は沖縄に属し、沖縄はわが国に属すと、わが外務官僚はこのとき直ちに反駁した。明らかに日本人であり、日本の利益を代表する弁論である。ところが、わが国の大新聞は、中国に遠慮してその日もあくる日も沈黙して、十何日か何十日か経ってから、ようやくわが国の領土だと社説で論証した。日支事変はもとより、日清日露の戦役まで侵略戦争だと中国人が言うのは自然だが、日本人が言うのは不自然である。それなら当人ではない。他人である。当人というものは、自分の利益とみれば、他人の島まで自分の島だと言いつ張るものである。それが健康な個人であり、国家である。故に健康というものは、いやなものもある。けれども、なお、個人も法人も国家も、健康でなければならぬのである。わが国の当人ぶりは、他国の当人ぶりにくらべると著しく遜色がある。(中略)白を黒だと言いつ張ること少ないのは、良心的なのではない。弱いのである。中国が言うべきことを、先回りしてわが国が言うのは、媚びているのである。かくの如く自分が言い張ること少なく、他人の言い張ることに迎合する国は、怪しいかな他国には尊敬されないものである。」

この『二流の愉しみ』という本は30年以上も前に出版されたものである。その後長年月の間、尖閣列島を巡る日本と中国の対応の仕方は、今なおおちつとも変わっていないのである。当時の外務省は中国に対して直ちに反駁したが、わが国の巡視船への中国漁船の戦闘的衝突事件に対する政府の対処法は腰抜け対応に終始した。わが国政府も政治家も国民も不健康状態を何十年間も続けている。日本国中が頓死願望に陥っているかのようである。